

Phykos. 18: 37-43.

RATNASABAPATHY, M. and SETO, R. Investigation on two species of *Thorea* Bory (Rhodophyta) found in West Malaysia. Phykos (in press)

SCHMITZ, F. 1892. Die systematische Stellung der Gattung *Thorea* Bory. Ber deutsch bot. Ges. 10: 115-142.

SETO, R. 1979. Comparative study of *Thorea gaudichaudii* (Rhodophyta) from Guam and Okinawa. Micronesica 15: 35-39.

SMITH, G. M. 1950. The freshwater algae of the United States. McGraw-Hill, New York.

YAMADA, Y. 1949. On the species of *Thorea* from the Far Eastern Asia. J. Jap. Bot. 24: 155-158.

M. ライトナサバパティ-・瀬戸良三**：西マレーシアにおける紅藻チスジノリ属の2新種

淡水産紅藻類のチスジノリ属の2種が、西マレーシアの北東部ターハン川と、クアラルンプール郊外のゴンバ川で発見された。これはマレーシアにおける本属の最初の報告である。この両種は本属の既知種に比して、藻体がかきわめて小さく、分枝が少ないのが、共通の特徴である。ターハン川の *T. prowsei* は *T. brodensis* に最も類似するが、藻体は一層小さく、髄層の幅がせまく、単胞子嚢が大きく、同化糸の基部に密集して形成される点が著しく異なる。ゴンバ川の *T. clavata* は *T. riekei* によく類似するが、藻体はこれよりはるかに小さく、同化糸が先端から基部に向かって次第に細くなり、全体が棍棒状になっているのが主要な特徴である。この特徴はまた本属の既知種にも見られないものである。この研究の結果から判断して、このマレーシアの2産地のそれぞれの種は明かに異なる新種であると考えられる。(*Department of Botany, University of Malaya, Kuala Lumpur, Malaysia. **662 西宮市岡田山 4-1, 神戸女学院高校生物学教室)

大野正夫：ラオ博士を悼む Masao OHNO: Palur Sreenivasa RAO (1931-1981)

インド国の国立 Central Salt & Marine Chemicals Research Institute の P. S. RAO 博士が1981年5月26日突然療治先のバローダの大学病院で脳出血のため50才の生涯を閉じられた。Rao 博士は南部インドのハイダー・バードに生れ名門のバナラス・ヒンドー大学で藻類を学び、海藻の分類・生態の研究を続けてきた。

1966年に1年間東海区水産研究所に留学し、須藤俊造博士の指導でテングサ属の生活史に関する研究をし、学位論文はインド産寒天原藻の *Gelidiella acerosa* の分類、生活史、生態に関する研究であった。滞日中は日本語もうまくなり、多くの日本の藻類研究者と接しておられた。彼の仕事は *Gelidiella* 属に関するものが多く31の報文があり、インドにおける寒天原藻の分類・生態から応用分野まで大きな足跡を残した。また Marine Algae 部門のチーフ・リーダーとして海藻の抗菌物質やホンダワラからアルギン酸やメタンガス製造に関する研究を指導していた。

彼の最近の業績は、1979年にインド政府・ユネスコ主催で、インド洋海域の海産藻類に関する国際シンポジウムを開催したことであろう。筆者はこのシンポジ

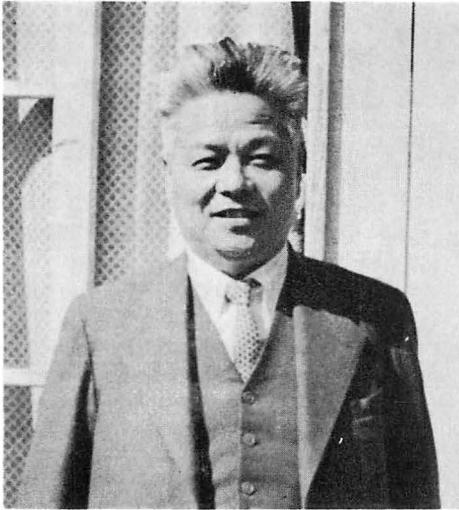
ウムに参加し、発展途上国の若手研究者の熱意に感動した。さらに昨年11月から3ヶ月国際協力事業団の専門家として再び訪れ、彼とともに日本の海苔網を用いて、インド洋で海藻の養殖試験を行ない、成功して喜びあった。彼の夢は、アジア・アフリカ地区の海藻研究者のための国際共同利用実験所をインドに設置することであった。すでにインド政府やユネスコに働きかけていた。彼は優秀な研究者であったとともに行政的な手腕もあり、インドにおける藻類学研究の推進者の1人であった。彼は再度日本へ訪れることを強く希望し、その手続を進めていた矢先であった。彼は長年にわたり日本藻類学会々員であった。

Mrs. RAO も藻類研究者で、同じ部門の上級技官の職にあり、学位をとる準備をしていた。彼女からの RAO 博士の突然の死を伝える手紙には「私は3人の子供達(大学生と高校生)を育てながらも学位はとるつもりである」と書かれていた。

P. S. RAO 博士のご冥福を心からお祈り申しあげる。

(781-04 土佐市宇佐町尻194 高知大学海洋生物教育研究センター)

大森長朗：猪野俊平先生の御逝去を悼む Takeo OHMORI: Shumpei
INOH (1907-1981)



猪野俊平先生が去る7月4日に急性肝炎のため逝去されました。享年74才であられました。先生は昭和47年4月に岡山大学を停年退職された後は、岡山市当新田の御自宅で悠々自適の生活を送られていました。3年程前に脳梗塞で倒れられ、一時は心配もしましたが、治療に専念されたかいがあって、最近では杖をつきながらも一人で外出されるほどに健康も回復されていました。10日間ほどの御入院で急に容体が悪くなり、安らかな眠りにつかれました。突然のことでまことに痛惜の念にたえません。

先生は明治40年4月1日に愛媛県越智郡菊間町でお生れになり、青春を松山中学校、松山高等学校で過ごされた後、昭和5年3月東北帝国大学理学部生物学科を卒業されました。同年9月北海道帝国大学理学部植物学教室に助手として赴任され、講師、助教授を勤められた後、昭和24年8月に新設の岡山大学理学部生物学教室の教授に就任されました。岡山大学を停年で御退職になるまで、この間、岡山大学理学部附属玉野臨海実験所長、岡山大学評議員、学生部長、理学部長などの要職を歴任してこられました。日本国中を吹き抜けた学園紛争の最中に、これらの要職についておられた先生の御心労は大変なものだったようです。

先生は、日本における海藻の発生学の開拓者であります。東北大学理学部の卒業論文は田原正人先生の御

指導のもとに、「ホンダワラ属の胚発生的研究」をまとめられ、これを東北大学の紀要に発表されました。この中では、イソモク、マメタワラなどホンダワラ属13種についての胚発生の観察の結果、種により第一次仮根の数が異なることを明らかにされました。その後、北海道大学に移られてもこの研究を続けていかれ、山田幸男先生の御指導も仰がれて、那産のフークス目植物5属22種の胚発生を比較観察されました。その結果、フークス目植物の胚の第一次仮根は、1本のものから32本のものまであり、この仮根数は卵の大きさが小さいものほど仮根の数は少なく、卵が大きくなるにつれて仮根数が多くなることを明らかにされました。この研究ができ上がった頃に、これをまとめて学位論文にと思い田原先生に見ていただくこととされたのですが、田原先生が、「自分が与えたテーマでは学位は出さない。自分でテーマを見つけてやりなさい。」といわれ、それから取り組まれた研究が、真正紅藻類の胞子発生についての比較研究です。この研究では日本各地の真正紅藻類6目19科51種の四分胞子や果胞子を培養し、その発生様式を明らかにされました。紅藻類の胞子発生には、直接型と間接型があり、さらに糸状型、二原細胞型、四原細胞型、盤状型、テングサ型、直立型などに大別され、この間の系統関係を論ぜられて、それまでは断片的にしか知られていなかった紅藻類の胞子発生の全容を明らかにされました。このフークス目と真正紅藻類の初期発生をまとめて「海藻の発生」として出版されています。

このような研究による藻類学の発展への貢献のほか、先生は日本藻類学会、日本植物学会の評議員として学会の運営にも意を注がれ、昭和46年に札幌で開催された第7回国際海藻学会議では組織委員として活躍されました。

先生の生家は造り酒屋をされていましたが、北大にお勤めの頃、家が倒産し経済的に苦しまれた時代もあったと伺っています。この時の経験からと思いますが、先生の経済的感覚は鋭く、学会の経理についてもたえず心配されていました。

先生は趣味の多い方で、絵画と音楽にはとくにくわしく、色紙にスイセンやマスカットなどの俳画をかいで楽しんでおられました。笑顔が絶えることのない先

生の円満な御人格は、先生のこのような御趣味からきているのかも知れません。

いま、ここにこのような先生を失ったことは残念でなりません。先生のお墓は私が勤めている山陽学園短大のすぐ西側にあり、私の研究室の廊下の窓から見えています。先生はここから、いつまでも藻類学の発展を楽しみに見まもっておられることと思います。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(703 岡山市平井 1-14-1 山陽学園短期大学)

業 績 目 録

著 書

- 1) 1943 植物の組織. 内田老鶴圃.
- 2) 1947 海藻の発生. 北隆館.
- 3) 1949 基礎植物学. 裳華房 (小野知夫・猪野俊平・佐藤重平).
- 4) 1950 植物の発生. 河出書房.
- 5) 1954 植物組織学. 内田老鶴圃.
- 6) 1965 最新生物学概論. 三共出版 (永野為武・猪野俊平).

論 文

- 1) 1930 Embryological studies on *Sargassum*. Sci. Rep. Tohoku Univ. Biol. 5: 421-438.
- 2) 1932 Embryological studies on *Sargassum* and *Cystophyllum*. Jour. Fac. Sci. Hokkaido Univ, V, 1: 125-133.
- 3) 1933 エゾイシゲの胚発生 (予報). 北大海研報告 1: 11-17.
- 4) 1934 ヒバツノマタの卵球成生と胚発生とについて. 北大海研報告 3: 51-60.
- 5) フークス科植物の組織細胞学的研究固定法. 植物及動物 2: 1057-1065.
- 6) 1935 Embryological studies on *Pelvetia Wrightii* YENDO and *Fucus evanescens* AG. Jour. Fac. Sci. Hokkaido Univ. Ser. V, 5: 6-23.
- 7) 1936 フークス科藻類の卵球成生並に胚発生に関する二、三の考察. 遺伝学雑誌 12: 153-155.
- 8) On tetraspore formation and its germination in *Dictyopteris divaricata* OKAM. with special reference to the mode of rhizoid formation. Sci. Pap. Inst. Alg. Res. Fac. Sci. Hokkaido Univ. 1: 213-219.
- 9) 1937 フークス科植物の胚発生に於ける仮根形成の比較研究. 植物及動物 5: 1283-1288.
- 10) ラッパモク属植物の胚発生学的研究. 植物及動物 5: 1480-1484.
- 11) ネプトモク (*Cystophyllum crassipes* J. AG.) の胚発生学的研究. 植物及動物 5: 1821-1829.

- 12) 1938 フークス科植物の胚発生の比較研究. 日本学術協会報告 13: 455-457.
- 13) 1939 イソモク, マメタワラ, ノコギリモクの生殖細胞の同時的且週期的放出について. 植物及動物 7: 781-783.
- 14) 真正紅藻類の胞子の大きさについて. 植物及動物 7: 1120-1122.
- 15) フクロフノリの胞子発生について. 植物及動物 7: 1237-1240.
- 16) ダルスの四分胞子発生について. 植物及動物 7: 1568-1571.
- 17) 1941 タオヤギソウの胞子発生について. 植物及動物 9: 31-34.
- 18) アカバギンナンソウとクロバギンナンソウとの胞子発生について. 植物学雑誌 55: 25-38.
- 19) ネジモクの胚発生について. 植物及動物 9: 263-265.
- 20) 真正ホンダハラ亜属の胚発生学的研究 (予報). 植物学雑誌 55: 85-93.
- 21) ウミゾウメン族の胞子発生について. 植物及動物 9: 505-510.
- 22) マクサの果胞子発生について. 植物及動物 9: 877-880.
- 23) 1942 紅藻類の胞子発生. 日本学術協会報告 16: 609-613.
- 24) 1943 フクロツナギの胞子発生について. 植物及動物 11: 793-796.
- 25) スラクサの胞子発生について. 植物及動物 11: 863-876.
- 26) 1944 Embryological studies on *Turbinaria* and *Cystophyllum*. Jour. Fac. Sci. Hokkaido Univ. Ser. V, 5: 199-214.
- 27) ホンダハラの形態と発生 (I), (II). 科学 14: 209-212, 241-243.
- 28) 発生学より見たる真正紅藻類の系統関係. 植物学雑誌 58: 50-51.
- 29) 真正紅藻類の比較発生学的研究. 医学と生物学 5: 441-447.
- 30) フヂマツモ属の発生. 科学 14: 281-283.
- 31) フォークス科の組織学・細胞学及び発生学的研究の進歩. 生物学の進歩 2: 493-592.
- 32) 1951 On the abnormal embryos of *Cystophyllum hakodatense* YENDO. Bull. Exp. Biology 1: 55-59.
- 33) 1953 The morphogenetical studies on the vesicles in Fucaceae. On the morphogenesis of the vesicles in *Sargassum piluliferum* C. AG., *S. patens* C. AG., *S. tortile* C. AG., *S. Ringgoldianum* HARV., *Cystophyllum sisymbrioides* J. AG. and *Hizikia fusiformis* (HARV.) OKAM. Biol. Jour. Okayama Univ. 1: 147-156 (INOE, S. and MATSUMOTO, R.)
- 34) 1954 フークス科植物の細胞学的研究 I. マメタ

- ワラの幼胚における核分裂について(予報). 染色体 21: 760-763 (猪野俊平・広江三樹三郎).
- 35) —— ホソバミリンの胞子発生について. 植物学雑誌 67: 87-90 (猪野俊平・太田三木夫).
- 36) —— フークス科植物の細胞学的研究Ⅱ. ヒジキの蔵精器内における成熟分裂について(予報). 染色体 21: 764-766 (猪野俊平・広江三樹三郎).
- 37) —— フークス科植物の細胞学的研究Ⅲ. マメタワラの蔵精器における核分裂について(予報). 染色体 21: 767-769 (猪野俊平・広江三樹三郎).
- 38) —— ホンダワラ属植物の異常胚について. 植物学雑誌 67: 233-237 (広江三樹三郎・猪野俊平).
- 39) —— フークス科植物の細胞学的研究Ⅳ. アカモクの蔵精器における核分裂について(予報). 植物学雑誌 67: 190-192 (広江三樹三郎・猪野俊平).
- 40) —— マメタワラの人工処女生殖(予報). 植物学雑誌 67: 271-274 (広江三樹三郎・猪野俊平).
- 41) —— Cytological studies on the Fucaceous plants. V. On the mitotic division in the embryo of *Sargassum patens* C. AG. Biol. Jour. Okayama Univ. 2: 1-6. (HIROE, M. and INOH, S.)
- 42) 1955 Some experiments on the eggs of *Sargassum piluliferum* C. AG. Biol. Jour. Okayama Univ. 2: 85-94. (HIROE, M. and INOH, S.)
- 43) —— ワカメの遊走子嚢における核分裂について. 染色体 22-24: 788-793 (猪野俊平・西林長朗).
- 44) 1956 フークス科植物の細胞学的研究Ⅵ. ヨレモクの蔵精器における核分裂について(予報). 染色体 27-28: 942-947 (広江三樹三郎・猪野俊平).
- 45) —— Morphogenetical studies in Laminariales I. The development of zoosporangia and the formation of zoospores in *Laminaria angustata* KJELLM. Biol. Jour. Okayama Univ. 2: 147-158. (NISHIBAYASHI, T. and INOH, S.)
- 46) 1957 コンブ目の形態発生学的研究Ⅱ. スジメの遊走子嚢発生と遊走子形成. 植物学雑誌 70: 228-232 (西林長朗・猪野俊平).
- 47) 1958 コンブ目植物における胞子嚢群の比較発生学的研究(予報). 植物学雑誌 71: 32-36 (西林長朗・猪野俊平).
- 48) 1959 アミジグサ科植物の生活史についてⅠ. アミジグサ, エゾヤハズ, オキナウチワの四分胞子発生. 植物学雑誌 72: 261-268 (西林長朗・猪野俊平).
- 49) —— アミジグサ目の形態発生Ⅰ. アミジグサ, エゾヤハズ, オキナウチワとコナウミウチワの四分胞子形成の比較研究. 藻類 7: 37-45 (石井慶三・西林長朗・猪野俊平).
- 50) 1960 ヒロメ, アントクメおよびカジメの胞子嚢群の発生について(予報). 植物学雑誌 73: 75-80 (西林長朗・猪野俊平).
- 51) —— 真正紅藻類の比較形態発生学的研究Ⅰ. エナシダジアとケブカダジアの胞子発生. 藻類 8: 59-66 (篠原千種・猪野俊平).
- 52) —— アミジグサ目の形態発生Ⅱ. アミジグサとオキナウチワの四分胞子母細胞の成熟分裂. 染色体 46-47: 1521-1530 (熊谷信孝・猪野俊平).
- 53) —— ヒロメの遊走子形成. 植物学雑誌 73: 494-496 (西林長朗・猪野俊平).
- 54) 1961 ツルモの遊走子形成. 植物学雑誌 74: 195-197 (西林長朗・猪野俊平).
- 55) 1962 アミジグサ目の形態発生Ⅲ. エゾヤハズの胞子形成の異状. 藻類 10: 88-92 (熊谷信孝・猪野俊平).
- 56) 1963 *Alaria valida* SETCH. et KJELLM., チガイソ, エンドウコンブ, チヂミコンブおよびアラメの胞子のう群発生について. 植物学雑誌 76: 14-23 (西林長朗・猪野俊平).
- 57) —— 海藻の細胞学的研究法(Ⅰ), (Ⅱ). 藻類 11: 30-38, 79-91 (西林長朗・猪野俊平).
- 58) 1964 アミジグサ目の形態発生Ⅳ. シマオオギの胞子発生. 藻類 12: 87-96 (熊谷信孝・猪野俊平).
- 59) 1965 カジメの遊走子形成. 染色体 62: 2035-2040 (大森長朗・猪野俊平).
- 60) 1967 ムカデノリの四分胞子発生について. 藻類 15: 61-67 (村上迪代・猪野俊平・大森長朗).
- 61) 1969 Meiosis in the oogonium of *Sargassum tortile* C. AG. Bot. Mag., Tokyo 82: 45-52 (OGAWA, H., INOH, S. and OHMORI, T.)